

緑ネット通信 No.79

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

松戸のみどり再発見ツアー報告

「歴史あるみどりをつないで初詣 ～七福神と富士山も～」

藤田 隆



1月11日25人の参加者は近隣の方も多かったが、「近所にも、よく知らない道があるかもしれませんね」と言ってスタートした。

本土寺では本堂にお詣りした後、ムクロジの木の実を拾ってペットボトルに入れて攪拌し、泡の出る様子を見てもらった。昔は洗濯に使っていたのだ。境内は樹木が多く、アジサイの冬芽、青々とした竹林、常緑樹の葉の輝きなどを楽しんだ。

医王寺への道の街角に青面金剛碑が立っていた。側面を見るとかすかに流山道と書いてあるように見えた。道しるべの役割を果たしたのだろう。並んで立っていた聖徳太子碑は職人仲間の講の名残とか…。いずれも宅地整備と相俟って整理統合されたのではないかと想像した。

医王寺は真言宗豊山派のお寺で松戸七福神の毘沙門天、江戸川八十八カ所巡り第76番札所、六地藏、稲荷神社を祀る。お詣りし、その後富士山展望ポイントへと急ぐ。目を凝らすと、うっすらとではあるが、山頂に雪をいただいた姿が浮かんで見えた。

農家の高垣が残され、ヒノキの垣根が続く道を行ったところの広徳寺は曹洞宗。松戸七福神の弁財天を祀る。戦国時代の高城氏の墓所から富士山が見えることでも知られている。

次に訪れた大谷口歴史公園は高城氏が築いた小金城の一部で、東葛地域を支配していたが、豊臣秀吉の関東攻めで開城した。当時、敵の来襲防御として作られた空堀・障子堀の跡が残されていた。階段を上った先には番場が広がり今では公園の広場になっていた。現地の看板を見ると、低地に空堀、高い場所には番場・本城を置いて、入り組んだ地形をうまく利用していることが分かった。

たまたま参加していた、公園のボランティアをしている方に伺うと、低地部分は空堀あるいは水をたたえる堀で、簡単に城に入れない構造だったそうだ。達磨口から空堀を歩きながら、大手口、水をたたえていた堀を説明してもらい、慶林寺に向かった。本寺は高城氏の妻が出家して庵を建てたのが始まりとされ、曹洞宗の寺院。松戸七福神の寿老人を祀っている。

お詣りを終えて一人一人に訪ねてみた。「普段行けないところが回れた」「楽しかった」などの感想が聞けた。



ココは北総台地の西のはずれ
 晴れた日には遠く富士を望む



拝見！ とんりの里山活動【流山市編その2】

緑のネットワーク・まつど 高橋 盛男

前回に引き続き流山市を取り上げます。同市の里山活動のはじまりと、前回紹介した「里山ボランティア流山」とのかかわり、その後の展開などを紹介しましょう。

市野谷の森から始まった流山の里山活動

「里山ボランティア流山」（通称：里ボ）が、里山ボランティア養成講座の修了生により、2011年に結成されたことは前回述べました。この講座を主導したのは「NPOさとやま」ですが、その母体である「流山自然観察の森を実現させる会」（以下「実現させる会」）の取り組みが、同市における里山活動（樹林地保全活動）のはじまりといえるでしょう。

「実現させる会」は、市野谷の森を残す活動を展開した団体です。市野谷の森は、現在「おおたかの森」の名で知られる樹林地です。元は約50haの森でしたが、つくばエクスプレス建設にともなう周辺の再開発計画で、失われようとしていました。

当時、絶滅が危惧される猛禽として、レッドデータブックに記載されたオオタカの繁殖が、市野谷の森で確認されたのが1993年。そして同年、「実現させる会」が結成されます。同会を中心とする保存活動の高まりにより、1999年に市野谷の森は半分の約25haを県立公園として残すことになりました。現在の森の愛称も、最寄り駅の名称も、このできごと由来しています。



無農薬無化学肥料の畑作業や収穫は、親子会員の大きな楽しみ。里ボ育ちの年上の子どもが小さな子どもの指導をしたり見守ったり…
(写真は2月26日活動日 提供は里ボ)



里ボが清掃の委託を引き継いだ西初石小鳥の森。中に大きな池（湿地化している）がある。

団体を設立するも予定の活動場所を失う

里ボの代表、生方康之さんが里山活動に入ったのは、恵良好敏さんとの出会いがきっかけでした。恵良さんは市野谷の森の保存活動を主導し、NPOさとやま（2002年設立）の代表も務めていました。

「彼に誘われてNPOさとやまの理事になり、養成講座の運営も担当しました」と生方さん。講座の終了後は里ボの設立を手伝い、事務局局長を務めることにもなりました。ところが……。

「この講座は、市野谷の森が県立公園になったとき、その維持管理者を養成する目的で開講されました。なのに、県立公園化が見送られて、私たち里ボは活動の場を失うはめになったんです」

しかし里ボ設立の年、流山市みどりの課の仲介で、芝崎小鳥の森の植生管理および調査にかかわらせてもらえることとなり、活動のスタートを切りました(2017年にこの森での活動は終了)。その後も、伊藤家の森、大畔の森とフィールドが増えていきました。

また、西初石小鳥の森は、NPOさとやまが市から受託していた清掃業務を生方さんが引き継ぎ、さらに2020年に里ボに受託が引き継がれるかたちでフィールドのひとつに加わっています。

一方、里山講座は現在「みどりの保全ボランティア育成講習会」として市が主催し、4日間のプログラムで毎年開催されています。子ども連れでも受講できるのが、松戸の講座にはない特色です。

親子会員が増えたはいいが困ったことが……

里ポの活動に、働き盛り、子育て盛りの若い世代が数多く参加していると、前回伝えました。そのうらやましい状況は、どのようにして生まれたのでしょうか。生方さんは「森のイベントの対象を、親子にしたことがひとつ挙げられる」と言います。

「子ども対象だと、親もついて来るが暇をもてあます。親対象だと子どもが楽しめない。だから、うちのイベントはすべて親子で楽しめるものになっています」

もうひとつは、若い世代の情報発信力。口コミやSNSで森体験が伝え広まっていくのです。それで会員も増えていきました。けれども「少し困ったことも起きてきた」と生方さんは言います。

「イベントを楽しんでくれるのも、会員が増えるのもいいのだけれど、その人たちがわれわれ本来の活動の戦力に、なかなかならないんですよ」

つまり、イベントの参加が、森の維持管理活動の参加に直接的につながらないまま、会員数が増えていったということ。そのため今は、新しい親子の入会希望に応えきれない状況になっていると言うのです。

一方、親子会員の増加を受けて、生方さんは数年前から、若手会員による事務局づくりに乗り出しました。作業にも熱心に取り組む人たちを軸に、作業以外の森のお楽しみを、若手が自発的に企画・実施できるように運営体制を整えたのです。

それが功を奏しました。事務局長の岡本さんを含む6人の事務局メンバーを中心に、親子会員が生き生き伸び伸びと活躍する風景は、そうして描き出されてきたのだそうです。

大畔の森を訪ねて、里ポには 松戸の里山活動団体にも参考になりそうところが、まだいろいろとあるように感じました。また訪ねてみたい森です。

松戸里やま応援団「いいなの会」 今とこれから

いいなの会代表 瀧上 和宏

「松戸里やま応援団 いいなの会」(以下「会」という)の活動する「大作の森」(以下「森」という)は、みのり台駅から徒歩15分の市街地に立地している。

2021年5月の活動開始から、主として森の整備作業と植生調査を行ってきた。

整備作業として、危険木や不要な低木の伐採、枝葉の切り落とし・整理、森内や周辺の除草、散策路の整備等を行ってきた。その結果、荒れて人の立ち入れない森から散策できる森に変わりつつある。整備作業は地道な作業であるが、着実に進めている。

植生調査は知見を有する会員を中心に行っている。

その結果をどのような森にしていくかの検討のベースとする。

今後は整備作業を継続するとともに、次のような活動をしていきたい。

まず、活動の内容についてである。森は住宅地にあり、近隣は直接または通学路をはさんで住宅と接している。このような立地環境であることから、地域コミュニティに根差した森にしていきたいと考えている。

そのために、住民の方への広報(作業やイベントに関するチラシ配布等)を継続しつつ森に対する要望を聴く機会をつくっていく。



一方、この森は平坦な地形であることや植生などから生物多様性保全機能、保健・レクリエーション機能（散策、交流等）、文化機能（自然観察等）の発揮が期待できる。

これから、住民の方の要望と森が発揮できる機能をすり合わせながら、誰のためにどのような価値を提供する森にしていくかという目的を定め、その実現に向けて活動していく。

次に、活動の進め方についてである。会の活動記録には、全会員が輪番で自由な思いを記入する「コメント」欄を設けている。”今日も達成感、爽快感など感じる楽しい一日でした”、”以前は特別気にもかけなかった森の景色とか気になるようになってきました”が最近の記入の実例である。会員が「コメント」欄に書きたくなるような、楽しい経験ができ、新たな発見があるような活動にしていきたいと考えている。

こんな活動ありました（活動報告より）

- ・金ヶ作野中の森でナラ枯れ枯損木の伐採を応援団技術・安全部会が対応（12.15）
- ・関さんの森にこども園園児訪問（12.7, 1.24, 2.9）、小金北小3年生が昔の暮らし道具見学に訪問（2.21）
- ・ミニ門松づくり：野うさぎの森、秋山の森、三樹の会など



・しんやまの森に園児訪問（2.22）

・囲いやまの森で子どもとまつどの「森で遊ぼう！」

～しぜんのコラム 54～

クイナとヒクイナ

現在、地球史上6回目の大量絶滅が進んでいると言われている。一方で、都市部では開発により生き物たちの生息環境が大きく失われたが、松戸市では豊かな生物相が残された千駄堀地域を、自然尊重型の都市公園「21世紀の森と広場」として整備した。

21世紀の森と広場では、現在もレッドリストに掲載されている野鳥が認められている。みどりの里では、昨冬からヒクイナ（千葉県・最重要保護生物）が高頻度で目撃された。今冬もヒクイナは健在で、さらにクイナも目撃されている。クイナは、千葉県では「消息不明・絶滅生物」になっているから、これが松戸で見られるというのは、すごいことである。



クイナ 2023.2.27 21世紀の森と広場

さて、クイナやヒクイナが今後も見られるといいのだが、それは難しいであろう。理由は、公園の整備や維持管理が、生き物に配慮せずにおこなっているからである。クイナ・ヒクイナに限らず、野鳥は警戒心が強いが、最近では草刈りや剪定が過剰におこなわれている。特に千駄堀池や野草園では、ヨシ、マコモ、ネザサなどが大量に刈り取られ、見通しが良くなった。このことは、野鳥が安心して暮らせる場所が減っていることを意味する。野鳥減少の理由は、公園の維持管理だけではないが、「自然尊重型」という理念は、今後も持ち続けてほしいものである。

（山田純稔）

★松戸のみどり再発見ツアー61（観察学習会No.77）★新型コロナウイルス関連で中止になる場合がございます。事前にご確認ください。

「市境に残る豊かな自然を訪ねる」

松戸市との市ざかい、市川市の消のえゆく森を訪ね、残され守られている長田谷津の自然も楽しめます。

4月16日（日） 9:30～12:30（小雨実施） 参加費300円（会員は100円）

集合 北総線大町駅改札口 9:30集合 持ち物 飲み物、帽子、マスク

申込み・問合せ：090-4078-3703（藤田4月1日から受付開始 18時以降）※申込制・先着30名

その他 歩きやすい服装でどうぞ お天気が良ければお弁当持参がお勧めです